

THE 森博嗣 PERFECT INSIDER

すべてがFになる



「先生……、現実って何でしょう？」
萌絵は小さな顔を少し傾けて言った。
「現実とは何か、
と考える瞬間にだけ、
人間の思考に現れる幻想だ」
犀川はすぐ答えた。
「普段はそんなものは存在しない」

Hiroshi Mori

N. D. C. 913 370p 18cm

すべてがF^{エフ}になる

一九九六年四月五日 第一刷発行 一九九六年二月五日 第六刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに
表示してあります

著者 森^{もり}博嗣^{ひろし} © HIROSHI MORI 1996 Printed in Japan

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二二二 郵便番号 一〇一 編集部 〇三・五三九五・三三〇六

販売部 〇二・五三九五・三三二六

製作部 〇二・五三九五・三六一五

印刷所 廣済堂印刷株式会社 製本所 和田製本工業株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部にてお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

THE 森博嗣 PERFECT INSIDER

すべてがFになる



「先生……、現実って何でしょう？」
萌絵は小さな顔を少し傾けて言った。
「現実とは何か、
と考える瞬間にだけ、
人間の思考に現れる幻想だ」
犀川はすぐ答えた。
「普段はそんなものは存在しない」

Hiroshi Mori

ISBN4-06-181901-1

C0293 ¥854E (0)



1920293008547

定価：本体854円

※消費税が別に加算されます。

すべてがFになる

森 博嗣

これぞ本格ミステリ！ と久しぶりに快哉を叫びたくなった。
しなやかで冷ややかな知性によって見事に織りあげられた、文
句なしの傑作パズラーである。

綾辻行人

新人森君の明々晰々たる知略に一読驚嘆し己れの不明を恥ぢ
た。諸君脱帽したまへ、比処に本格の精髓が有る。法月綸太郎

リアルオーディオよりCOOLでJAVAよりもHOT。ずっと8
ビットだったミステリの世界もこれでようやく32ビットになっ
た。最新のブラウザの用意を。

我孫子武丸

度胆を抜かれる死体登場シーンと、それにも増してショッキ
ングな真相。シャープで破壊力抜群のこんな本格ミステリを多
くの読者が待っていたことだろう。

有栖川有栖

すべてがFになる

博嗣

ODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ブックデザイン||熊谷博人
カバーイラストレーション||辰巳四郎

目次

第1章：白い面会	10
第2章：蒼い再訪	42
第3章：赤い魔法	80
第4章：褐色の過去	112
第5章：灰色の境界	147
第6章：虹色の目撃	181
第7章：琥珀色の夢	212
第8章：紺色の秩序	245
第9章：黄色いドア	279
第10章：銀色の真実	305
第11章：無色の週末	351

THE PERFECT INSIDER

by

Hiroshi Mori

1996

登場人物

真賀田家

真賀田	左千朗	工学博士
真賀田	美千代	言語学者、左千朗の妻
真賀田	四季	天才プログラマ、左千朗の娘
栗本	其志雄	四季の同居人
佐々木	栖麻	四季の同居人
真賀田	道流	四季の同居人
真賀田	未来	真賀田四季の妹
新藤	清二	真賀田研究所の所長、左千朗の弟

真賀田研究所

新藤	裕見子	清二の妻
弓永	富彦	医師
弓永	澄江	看護婦、富彦の妻
山根	幸宏	真賀田研究所の副所長
水谷	主税	主任プログラマ
島田	文子	プログラマ
望月	俊樹	警備員
長谷部	聡	警備員
デボラ		研究所の管理システム
ミチル		ロボット
P1		ワゴン型ロボット

その他の人々

儀同	世津子	雑誌記者
犀川	創平	N大学工学部建築学科・助教授
国枝	桃子	N大学工学部建築学科・助手
浜中	深志	N大学工学部建築学科・大学院生
西之園	萌絵	N大学工学部建築学科・1年生

それでは、なぜ人間は交換をするのであろう。その理由は脳にある。脳は情報を交換する器官だからである。まったく異なるものを交換し、等値化できるアナロジーを有する。記号や言語は、見ることも聴くこともできる。すなわち、電磁波と音波が脳の中で等値変換されて、私たちのシンボル活動が生じている。「金の匂いがする」とは、食物と金が交換され、代替できなければ成り立たない。アナロジーを利用して、対象世界をシミュレートするということは、実のところ人間の大きくなって余剰になった脳に由来するのである。一つの信号に対する一つの反応の回路が余分にあるために、喩えるものと、喩えられるものとが生まれ、代替が起こり、シミュレートを試みる。かくして、この余剰が比喩となり、抽象化を生み、オブジェクト指向の考え方になったのである。

（青木淳／『オブジェクト指向システム分析設計入門』）

第1章 白い面会

1

今は夏。彼女はそれを思い出す。

無表情なコンクリートで囲まれた部屋には、季節の気配が届かなかった。建物のどこにも、外界を覗き見る窓はない。歴史も時間も人工的に刻まれている。寒くも暑くもない。

おそらく、人間以外の生物、動物も植物もここには存在しないのではないだろうか、と彼女は思う。

明るすぎるくらい真っ白な小部屋には、本当に何もなかった。空気は浄化され、埃も少ない。人工的な静けさがあるだけだ。アルミでできた無機質な椅子がぼつんと一つだけ置いてあったので、彼女はそこに腰掛けた。

前面には大きなディスプレイが壁に埋め込まれている。画面には、彼女が今いる部屋と同じような、真っ白な空間が映し出されている。見上げると小さなカメラのレンズが梟のように彼女の方を睨んでいた。

画面の映像は、この部屋のものではない。自分の姿が映っていないからだ。

彼女はそのまましばらく待った。

バッグは部屋の外に置いてきた。彼女のバッグにはノートパソコンとカメラが入っていたが、この部屋には何も持ち込めない決まりだ、と外の男に言われた。その男は、この建物のボスだったが、気さくな人物で好感が持てた。

ディスプレイの映像に変化がある。画面に映し出されている部屋の中に、白い服装の女性が入ってきた。部屋の白さもあって、人影のアウトラインは曖昧であつたが、カメラのアイリスが少し自動調整され、すぐよく見えるようになった。

ディスプレイの中の女は、椅子に座って、こちらを向いた。想像していたよりも、ずっと若い。

「こんにちは」女の声スピーカーから聞えた。「お名前は何というの？」

「西之園です」彼女は答える。「初めまして、あの、私は……」

「いえ、姓は知っています。お名前は？」

「萌絵です」

「モエさん？　どんな字を書くの？」

「草萌ゆるの、萌という字に、絵の具の、絵です」

「お歳は？」

「もうすぐ二十歳です」萌絵は答えた。彼女は沢山の質問を用意していたのだが、画面の中の女性は意

外にも会話をリードしている。

「どうやって、ここへいらしたの？」女はきいた。

「ヘリコプターで来ました」

「所長のヘリコプターね？」

「いいえ、違います」萌絵は首を振った。「あの、眞賀田博士……。私の父をご存じですね？」

「165に365をかけるといくつかしら？」女は突然質問する。

「55万……。5555です。5が六つですね」萌絵はすぐ答えた。それから、少し驚く。「どうして、そんな計算を？」

「貴女を試したのよ。計算のできる方だと思ったから……」女は少し微笑んだ。「でも、7のかけ算が不得意のようね。今、最後の桁だけ時間がかかったわ。何故かしら？」

「別に不得意ではありません。7は好きな数字です」萌絵は脚を組んで、気持ちを落ちつかせる。

「いいえ、貴女は気がついていないのよ。貴女が初

めて九九を習ったとき、貴女は、7の段が不得意だったはずよ。幼稚園のとき？ もっと小さかったかしら？ 7は特別な数でもものね。貴女、兄弟がいらないでしょう？ 数字の中で、7だけが孤独なのよ」

萌絵は確かに一人っ子だった。

「あの……、お話をおきしても良いですか？」萌絵は何とか自分のペースを取り戻そうとする。「私は、父のことで……」

「頭の回転も速いわ。決断力もある。それに……」女は萌絵をじっと見ながら言う。「思考が飛躍する特徴があるわね。それが、貴女の一番の才能よ。そう……、西之園恭輔博士^{きょうすけ}には十六年前に四回お会いしました。一度はアメリカです。そのとき、貴女も一緒にいらしたわ。私は貴女の名前を博士におききましたんですけど、貴女が泣き出したので、その質問にはお答えにならなかったんです。貴女は、赤いドレスを着て、頭にリボンをつけていたわ。十六年

前の三月の……、十六日ですね。場所はシャンペーンです」

「覚えておられるんですか？ それとも……」萌絵は驚いて尋ねる。

「それとも、今日、貴女が来るから、調べておいた……と思われたのね」女はすぐ答えた。「意味のない質問ですね」

「ここに、もう何年いらっしゃるのですか？」萌絵は無理矢理別の質問をした。

「自分の知っていることは質問しないでね」女はまた微笑んだ。「会話に、そのような導入部は無用よ。接統詞もいりません。脈絡というものには興味がありませんから……」そう言って、女は長い髪を片手で払う。

「ご両親を殺したのは本当ですか？」萌絵はすぐに別の質問をした。

「そう、対処が迅速ね。洞察力、観察力も優れている」女はゆっくりとした口調で言った。抑揚のな

い、しかし歯切れの良い低い声である。「貴女のご両親は？　どんな方でした？」

萌絵は、咄嗟^{とつさ}に表情を隠そうとする。

「ご両親ともお亡くなりになったのは知っています」女は、淡々と続ける。「貴女はそれで私に会いに来た、と自分では信じておられるわね。でも、私から貴女のご両親のことをお話ししても、貴女が満足するような情報は何もありませんよ。西之園博士はジェントルな方でしたね。私は、奥様には面識がありません。私は、ご両親が、貴女にはどんな方だったかをきいているのです。あの飛行機事故を見られたのね？」

「私の心の中が読めるようですね」萌絵は武装を固めて、言葉を選んだ。

「心なんてものは、ありません」女がまた微笑んだ。「貴女は、今、人間の精神の話をしようとしていますね。よろしい、少しつき合いましうか……」

「貴女は誰ですか？」萌絵は突然湧^わいてきた疑問を素直に口にした。

「ああ……、これは驚きました。貴女は、本当に素晴らしい頭脳を持っていますね」女は、そう言う、目を少し見開いて、しばらく黙った。「それが、人間の思考の切れ味というものなの。貴女、今、急にそれを思いついたでしょう？　素晴らしいわ……。それが機械にはできません。私が誰かなん

て質問、人工知能には、思いもつきませんものね。でも、貴女は私に会って話をして、たった数十秒で自分の構築していた真賀田四季^{しき}像とのギャップを直感して、その質問を無意識に口にしたのです。そのアクセスの素早さが、機械には真似ができません。大切なことなんです。私は、真賀田四季です。貴女が不審に思うような、他の人格ではありません」「真賀田博士、何故、ご両親を殺害したのですか？」萌絵は同じ質問をもう一度した。

何故かという問には、答えられませんの「真賀田

女史は微笑みながら答えた。「どうやって殺したのか、ならお話しできますけどね。目撃しましたから……」

「答えられないのは、どうしてですか？」

「知らないからです。想像することはできますが、答はどれも適当とは思えません。殺した本人にきいていただきたいわ」

「博士が殺したのではないとおっしゃるんですか？」 萌絵は身を乗り出す。

「そうね。少なくとも、私の意識では、それが真実ですね。貴女のご両親が事故で亡くなったとき、貴女は、何故事故が起こったのかに興味がありました？ 貴女はそのとき……」

「十六です」 萌絵は冷静にそれを口にした。「事故の原因には興味はありません。父も母もそれで戻ってくるわけではありませんから」

「私の両親は、私が十四のときに亡くなったのよ」 真賀田女史の表情には少しの陰りもない。「皆さん

は、私が両親を殺したと思っていらっしゃるわね。でも、確かに、それもありません。私は、両親の命を奪った凶器を持って、血塗れになっていたのでからね……。貴女の言われたように、原因を究明しても何も創造されません」

「でも、覚えていないんですね？」 萌絵は片方の目を細めた。

「それは正確ではありませんね。覚えてはいるんですよ。どうやって、殺したのかも、全部」 真賀田女史は、優しい表情で答えた。「お人形がやったんです。私、それを見ていましたの」

「お人形？」 萌絵はきき返した。「どんな人形です？ 人形が殺人を犯したのですか？」

「さあ、どこかに行ってしまったね」 真賀田女史はまた髪を払った。「このお話を皆さんが信じないことくらい理解しています。でも、真実というのは他人の理解とは無関係です」

真賀田四季女史は、萌絵よりもずっと歳上のはず

である。しかし、目の前のディスプレイに映し出されている彼女は、十代の娘のようだった。痩せ細った顎に彫りの深い顔立ち、色白の肌とともに、日本人離れした印象である。長い黒髪は真っ直ぐに整い、華奢な両肩を一部隠している。画面では今そこまでしか見えなかった。

「あの、それは、つまり……、博士の別の人格が、殺人を犯したということですか？」萌絵は質問する。

「それも、たぶん間違いです」真賀田女史はすぐ答えた。「私の中に別の人格がいることは本当です。でもね、西之園さん。私の中の他の人たちは、私の両親を知らないのよ」

「どうして、そんなことがわかるんですか？」

「だって、ずっとお話をしているんですもの。もう、ずつとよ。それくらい、わかりますわ。1から10までの数字を二組に分けてごらんさい。そして、両方とも、グループの数字を全部かけ合わせる

の。二つの積が等しくなることがありますか？」
「ありません」萌絵は即答した。「片方のグループには7がありますから、積は7の倍数になりますけど、もう片方には7がないから、等しくはなりません」

「ほら、7だけが孤独でしょう？」真賀田女史が言った。「私の人格の中で、両親を殺す動機を持っているのは、私、真賀田四季だけなのよ。ですから、私の肉体が両親を殺したのなら、私が覚えていないはずはないの。私だけが、7なのよ……。それに、BとDもそうね」

（BとD……？）萌絵には意味がわからない。

「あの、動機というのは何ですか？」萌絵がきいた。

「さあ、外で遊びたかったのかしら……」画面の中の真賀田女史は答える。「いろいろな証拠から、それくらいだと判断できますね。動機なんてものに、何か意味があると本当に考えているの？ 貴女、そ